

## 本当にシビルエンジニアか



栢原 英郎  
論説委員  
(社) 日本港湾協会・会長

「土木工学を英語で表せばシビルエンジニアリングであり、これは軍事技術ミリタリーエンジニアリングに対する言葉である。シビルエンジニアリング、即ち文明社会を築く工学が我々の目指すものである」。細部までは正確に記憶していないが、これがほぼ半世紀前、筆者が受けた土木工学科の最初の講義で、情熱あふれる若い助教授が我々学生に語った言葉である。

土木工学に対するこのような説明は、今日でも土木の社会では変わらずに引き継がれている。例えば東京工業大学のウェブサイトでは、以前にも紹介したが（学会誌 2009 年 3 月号「会長からのメッセージ」）、土木工学を「私たちの社会が原始社会ではなく文明社会となるための工学であり、人間が生物上のヒトではなく、秩序ある暮らしを営む市民・公民となるための工学」と説明している。

では、我々に求められる、すなわち文明社会を築く者たちに求められる資質とは何であろうか。そのことを詳しく、正確に語る知識は全くないが、直感的に言えることは、創造性、柔軟性、多様性等であり、それを日頃から涵養してくれる視野の広さ、好奇心の旺盛さではないかと考える。

さて、昨年秋のある日、建設業界では大手の専門紙が「社会資本整備が必要である」という主張の特集を組んだ。政権交代の後、新しい政権が「コンクリートから人へ」というキャッチフレーズの下に社会資本整備に関わる投資を大幅に削減しようとしていることを受けての特集であった。斯界の論客 20 名近くが、このような特集としては珍しく、それぞれかなりの紙幅の論を展開しており、私も混沌としていた自分の考えをまとめるのに大いに有効であった。しかし同時に、読み進むうちに気分が落ち着かなくなってきた。

論説に多く見られた主張の一つは、「このような時こそ社会資本整備に関わる長期構想をつくり、それに基づいて粛々と我が国に必要な社会資本を整備して行くべきである」というものであった。もっともな主張で、そのこと自体に異論を挟む気持ちはない。奇異に感じたのは、そのことに触れた筆者の全員が、現在そのような計画が無いことを問題にし、計画を新たに作るべきだと主張していたことだ。誰一人として、平成 20 年 7 月に閣議決定された「国土形成計画（全国計画）」のことも、その方針に基づき東北から九州まで、ちょうど全て出揃ったばかりの広域地方

計画についても触れた論説がなかった。筆者が昔全国総合開発計画などに長く携わったからそういうのではない。発表のタイミングにまで神経を研ぎ澄ませた当時の策定者の努力があったとしても、一昔前であれば社会資本にかかわる仕事をしている者で全国総合開発計画が念頭になかった者はまれであったように思う。

土木とは全く無縁の組織がこれらの計画を作っていたのであれば、まだ理解もできる。しかし、国土審議会（特に、計画部会）でも各地の広域地方計画協議会でも、土木技術者が大きな働きをして、はじめて出来上がった計画である。「いえ、あれは理念が主で、具体的なプロジェクトはあまり書かれていませんから」といった友人がいる。しかし、計画の真髄は「事業計画一覧表」にあるのではなく「理念」にあると思う。事業計画（プロジェクト）は、条件が変わればすぐに古くなる。しかし理念には不易性がある。

「人口減少が国の衰退につながらない国土を造る」という一文は、全国計画を取りまとめた森地茂計画部会長（政策研究大学院大学教授、第 9 代土木学会会長。なお、計画部会は現在は廃止され政策部に衣替えをしている。）が、成案を国土審議会に提出した時に添付した計画取りまとめの視点のひとつであるが、私はこの一言ほど現在の社会資本整備の必要性とその方向を明らかにしているものはないと考えている。この一言が立派な長期構想であり、個別具体の事業はこれを尺度として評価し、構成すればよい。

自分の世界のことで精一杯で、周辺の世界が目に入らないというのではシビルエンジニアの名前が泣くだろう。土木技術者が厳しい環境に置かれている今こそ、アンテナを高く掲げ、周辺に起こっている事柄に関心を持とう。健全な好奇心をもち続けよう。それが土木技術者がシビルエンジニアであり続けるための必須の要件ではないかと考えている。